

野球部生活の思い出

第15期(昭19卒) 佐々木 満

昭和17年、私は旧制能代中学の4年生だった。その年の6月、われわれ野球部は、近づく全県大会にそなえ、教室を借りて合宿生活に入っていた。そんな日のある深夜、日中の猛練習で疲れ、ぐっすりとおねこんでいたわれわれは、突然、大きな怒鳴り声で眼をさまさせられた。その男はこう叫んでいた。

「おーい、甲子園へ着いたぞ、みんな起きろ！」
うすい裸電球の下、ねむい眼をこすってよく見ると、その男はなんと私の隣に寝ていた筈のS君ではないか。いつのまに着がえたのか、洗濯のきいた試合用のユニフォームをまとった彼は、手にもったバットで床をたたきながら、気がいのように教室の中をのし歩いているのだった。「おーい、みんな起きろ甲子園へ着いたんだ！」と絶叫しながら。

やがて、キャプテンのHさんが立ち上がった。そして、荒れ狂うS君の胸元をつかんで、「何をねばけているんだ！静かに寝ろ!!」といって強い平手打ちをくらわした。S君は、迷いからさめたように元の寝床にもどり、深い眠りにおちていった。あたりは再び元の静寂がやってきた。しかし、耳をすましていると、あちらこちらから、すすり泣きの声がきこえる。キャプテンのHさんも泣いているようだった一。

30年以上も経過したあの夜の出来事を私はまだ覚えている。恐らく生涯忘れることがないだろう。そして、中学生たちの心をこんなにまでも強く捉えている「甲子園」というものは一体何なのであろうか、私はいまだに分からない。

県南の湯沢に近い田舎の小学校をおえた私が能代中学に入ったのは14年春だった。入学式までの10日間、私は毎日のように能代中学のグラウンドに出かけ、野球部の練習を見ていた。そして春の陽射しを全身に浴び、元気に声をかけ合う野球部の人たちに強いあこがれを抱いたのだった。入学式の当日、すでに私の顔を覚えていてくれたあ

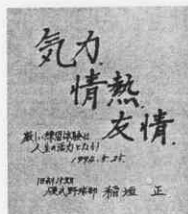
る先輩のすすめに従い、まよわず野球部に入った。爾来5年間、私の中学生生活は、野球に始まり野球に終わる。戦時中のことで、野球をとりまく環境は物心ともにきびしくなっていく。やがて全国大会、全県大会も中止。しかしわれわれは練習をやめなかった。破れたグローブは縫い合わせ、ユニフォームはつぎをあて、最後には地下足袋までも履いて、いつ再開できるか分からない大会をめざして精進を続けた。

今思いかえしてみると、すべてがただなつかしい。そして激動の世の中にあって、若い時代の5年間を一つのことに打ち込んだ経験は限りなく貴いことに思える。もう一度この世に生まれることがあるならば、私は同僚S君らとともに再び能代高校野球部に入り、あこがれの甲子園をめざしたい。

—創立50周年記念誌より—

戦時下、野球部の思い出

第15期(昭19卒) 稲垣 正



放課後、カーン、カーンと耳に響く音にひかれて、よく野球部の練習を見に行ったが、時折ファールボールが飛んでくるので、ぼんやり眺めているわけにいかない。ある日、たまたまそばに転がってきたボールを拾い、握った瞬間、「石の球だ」と思った。よくこんな硬いボールを投げたり捕ったりするものだ、驚き感心したものである。そんな或る日、三年先輩の鈴木音安さん(故人)に「君も柳町だから野球部に入らねばならない。明日からグラウンドに來いよ」と言われてとまどった。しかし、それは半ば命令のようなものだった。

数日後、私は部長で学級担任でもあった上原俊一先生に入部の届けをした。入部してみると、鈴木さんの言ったとおり、家の向かいの大和勇助さん(旧10期)をはじめ、5年生の住吉忠三、4年生の金谷忠治、鈴木音安、杉原茂さん等は皆柳町の人達で、平川民治監督(故人)の下で汗を流

し鍛えられた名選手ばかりであった。それから毎日放課後は部室に駆けつけて、グラウンドを均らし、水を撒き、ネットを張り、用具を運び出して準備を整え、上級生の来るのを待つのが一年部員の日課となった。また、雨の日は内野周囲に杭を打ってロープを張りめぐらすなど、私達はすべてマネージャーの安保高俊さんの指示に従って走り回った。私達はユニホームやグローブは部室の箱の中から適当に体や手に合ったものを選んで使用したが、どれもこれも先輩の使い古したぼろぼろのもので、わけでもグローブは中の綿のようなのは全くなく、革の手袋といった体のものだった。勿論スパイクはなくズック靴である。練習中は、内、外野で掛け声やボール拾いに走り回る。日が落ちる頃になると、ボールに石灰をつけて白く目立つようにしてやる。ようやくノックが終わると、外野に並んで掛け声の練習、それからベースランニング、そしてミーティングで終わるが、一年生はそれからグラウンド均らし、用具の後片づけ、最後に部室の鍵を確かめてようやく終わりになる。この年7月の奥羽大会県予選、一回戦でわが能中は7回コールドで横手中に大勝したが、制覇は成らなかった。また、この大会で秋商に長谷川という名投手がいることを知らされたのが印象に残っている。

しかし、わが能中にも5年生の桑名磋さん(故人)という名遊撃手がおられたことが忘れられない。

昭和15年、とにかくつらい一年をなんとかやり抜いて二年になったが、残念ながら退部者も出て同期も数人となった。そして深井、熊谷君等の新入部員を迎えた。金谷さんを新主将に、鈴木、杉原、西村(長谷川)、今、原田、4年の伊東、三浦、鎌田、勝永、3年に石田、平山、工藤、西村、浅野、藤原による新チームがスタートした。

2年になったとはいえ、われわれは佐藤市雄マネージャーの下で相変わらずの毎日であった。この頃は、日華事変も長期化の様相を示し、用具、特に革類は極度に不足してきており、硬球も入手困難となり、一、二年生は練習終了後、皮の破れたボールを各自数個ずつ割り当てられ、家へ持つ

て帰り、木綿糸で縫いあげていくのが日課となった。ひびのはいったバットは釘や麻糸などで補修して、バット振り用にするなど、悪戦苦闘の状況となった。しかし、こうした中でも夏の大会を目指しての猛練習は続いた。思えば、私の在学中を通して、この年の野球部が最強であったと思っている。鈴木、杉原の名バッテリー、金谷、西村、鎌田の内野陣に、今、伊東、三浦の外野陣で固め、投打揃ったチームであった。それだけに、平川監督の熱のこもった厳しい叱声がグラウンド一杯に響き、真っ暗になるまで厳しい練習が続けられた。その成果がみのり、全県大会では宿敵秋商を破り、準決勝まで進んだ。残念にも秋田師範に惜敗はしたが、しかし、能中野球部は8月の奥羽大会に初出場を果たしたのである。奥羽大会では、鈴木さんが10数個の三振を奪う好投をしたが、強豪五所川原農林に延長の末敗れ、涙をのんだ。

私達下級生は応援に行けなかったが、帰って来た選手を駅頭に迎え、真っ黒に日焼けした先輩の顔を見て涙した。そして先輩のバックなどを持って帰ったことが忘れられない。この秋、名監督平川さんは辞任され、伊藤廉(旧4・故人)氏に後任を託されたのである。

昭和16年、3年になってわが同期も、佐々木、鈴木、播磨谷、稲垣、秋元、杉本の6人となった。新チームは伊東(主将)、三浦、鎌田、勝永、4年に石田、平山、浅野、西村、藤原、伊藤、2年の深井、熊谷等であった。われらも三年になってようやく、トスやバッティング練習に加わることになり、やっと部員になったという実感が湧いてきたものだ。伊藤監督は前年度の先輩のあとに続けと、さらに厳しい練習を続けた。当時は私達がグラウンドに出て行くと、監督はすでにベンチで待っており、バッティングに入る頃には、佐藤憲一郎(故人)、村中忠吉(故人)、宮腰庄作(故人)、米光博、田山周作さん等、多くの先輩が、ユニホームに着替えて練習に加わり、共に汗を流したのである。特にシートノックに入ると、交代で激しいノックを受け、グラウンドに這わされた。動けなくなると側へ来て気合いを掛ける。さらにまた、

「キャッチャーボール」の声がかかると、上級生から順に、バックネット前に一人ずつ出て、内野ラインにぐると円く並んだ部員と先輩達からの豪球を受ける。両手でしっかり捕らなかったり、一球でも落球すると、また最初の人からやり直しという厳しい練習であった。伊藤監督の言う「野球の基本はキャッチボールから」を徹底して練習させられたのである。受けそこねて顔に当て倒れる者もおれば、突き指をする者もいる。痛さ故、自然に涙がにじみボールがかすむ、手に水をかけてまた頑張る。手の甲が腫れあがり、夕飯で茶碗が持てず、テーブルに置いたままスプーンで食べるような日も続いた。しかし、こうしてスピードに馴れ、しっかり捕球が出来るようになると、怖さがなくなったのも事実であった。スライディング、ホームへの滑り込み練習などで両肘はすり傷の絶えることがなかった。監督は私達の出来るまで何度も繰り返しやってみせる。実戦的な練習法を重視したファイト旺盛な人であった。当時の強化合宿はグラウンド下の松林の中にあった寄宿舎であったが、厳しい練習と汗と埃にまみれた体を、栄町の風呂屋へ駆け込んで洗い流す。この時はさすがに怖い先輩も笑顔になり、楽しさが湧いてくるひと時であった。物資もまもなくなくなってきた時勢であったので、先輩達の差し入れや援助に負うところがおおかったが、奇しくも能中対能工の能代勢の決勝となり、三浦、石田—平山のバッテリーで善戦したが、初回で大量点を奪われ、能工の打棒に屈し、大差で破れた（能工初優勝）。こうした中にも戦局は毎日に急迫した情勢となり、国策にそった学制改革が進められ、7月には全国中等野球大会は禁止となり、野球部も野球班となり、学生服も国防色に戦闘帽（新一年生より）と変わるなどした。そして遂に12月8日太平洋戦争が勃発するに至った。

翌17年、石田、平山、工藤、藤原、西村、伊藤、4年は佐々木、稲垣、秋元、播磨谷、3年は深井、熊谷、2年は平山、松浦等で新チームの練習が始まったが、残念ながら戦局急を告げるに伴い、多くの制約を受けるようになった。しかし、われら

は逆に情熱を燃やして野球に打ち込んだ。だが、5月、これまで行われてきた市内3校野球リーグ戦も、能工が廃部するに至って事実上開催不可能となり、能代市中等野球連盟は解消し、代わって能中対能商で春秋の定期戦を開催することになったのである。そして5月10日、初の春の定期戦一回戦が、能中グラウンドで行われた。能中は工藤—平山のバッテリーで善戦し、11対7で初戦に勝利したが、二回戦は1対5で能商に敗れた。

ちなみにこの定期戦から両軍ともスパイクの使用は禁止され、ズック靴または、地下足袋でグラウンドを走り廻ったのであり、応援団も復活したものの、試合中は拍手のみというものだった。審判の「よし」「だめ」などのコールは耳になじまず、まさに戦時下における最悪な状況での野球となったのである。

こうした中で、11月、佐々木君を新主将として秋の定期戦に臨んだが、残念ながらこれを最後に遂に野球部は解散となり、部員はそれぞれ他の班に移ることになったのである。以後、野球部は終戦後21年まで活動を中止することになる。同時に、これまで幾多の先輩と共に練習の汗を流してきたグラウンドにも、増産のための鍬が打ち込まれることになったのである。戦後復員してあのグラウンドに行ってみたが、周りの桜の老木のみが名残りとどめていたのを眺め、感慨深い思いであった。

ふりかえれば、私の野球部時代は、先輩の残していったような輝かしい戦績もないまま、まさに戦況の進展とともに過ぎた日々であったと思う。しかし、あの激しい苦しい練習に汗した日々は、野球という一つの秩序の中で、熱中して自分を鍛えることが出来た青春時代であったと今もなお自負している。後年社会に出て、同じ野球部で育まれた熱い友情によって、同輩は勿論、先輩、後輩の諸兄と共に広く知人友人を得て日々を歩めるようになったことを思えば、あの練習で流した汗が私の人生の活力になっているのだと思えてならない。

母校が70周年を迎えた今日、校舎をはじめ、雨天練習場、整備された野球グラウンド等、素晴ら

しい環境に恵まれた中で、部員達は元気潑刺と練習しているのを見るにつけ、羨望と同時に往時を顧みて時代の流れというものを感じさせられるのである。後輩諸子の健闘を祈って止まない。

(元松陵会副会長)

—創立70周年記念誌より—



しるべ
標

第25期 太田 久

高校野球の哀歓は、あの真紅の大旗を中心として彩られており、1年間にわたる苦練、それは夏の甲子園大会が終わった翌日からすでに始まっている。春の花を忘れ、秋のもみじにそむき、全国の球児が皆等しく払っている大きな努力である。しかもその努力が実って、晴れの甲子園大会に出場できるのは実に至難中の業^{わざ}といえるだろう。試合に勝つか負けるかは、日頃の練習に直面した各選手の気構えと、しっかり身につけた精神力(気力)との厚薄の度合の如何によって決することだろう。華麗な守備を持ち、自慢の脚力、長打力を持ち、いかに優れた投手をもってしても、これを運用する心に安定性がなければ実は結ばない。勝負を決するものは、技術の巧拙ではなく、確かな練習から作り上げた強気な精神力である。精神力の薄弱なものはいかに理論に精通し、技術力に拔群であっても実戦において、それを如実に表すことは不可能である。

私のチーム作りは、毎年入部してくる部員という素材をよく理解して、その特性を生かしたチームに作り上げることにしている。そこには当然日々、部員一人ひとりがテーマを持った、生きた練習を……。目的意識をもって練習に直面することと、ただ存在しているということでは、大きな違いがあるだろう。目的意識をもって、その達成後、果たしてこのチームが、どんな姿に変わってゆくのか、自分がその上に立って、如何なる環境変化の中で、今後このチームを見るのは、非常に楽しくもあり、又、不安でもある。しかし、不安と期待の共存する毎日であればこそ、その毎

日が全く新たな味わいで感じられ、立ち向かって行こうという意欲が湧いてくるのである。

高校野球は、若人の燃えたぎるロマンと熱情と心意気の昇華された闘いの邁進するところに意義があるものと信じて……。

「人は城、人は石垣、人は堀、情は味方、仇は敵なり」戦国の名将武田信玄の歌である。人を信頼するという信念は、なにもスポーツの世界ばかりではない。人と人、心と心の大切な絆。北国の厳しい寒気の中にも「ことしこそは」暖かい春の訪れを感じさせてほしいものだ。

入道雲が六甲の山に浮かび、鳶の緑におおわれた甲子園球場。赤い花の夾竹桃が咲き、カチ割り氷の輝き。夏の甲子園には故郷の風が吹く。そして近き日に松陵の新しい風が吹き抜けることを期待して……。

最後に、過ぎし日今は亡き父から贈られた「甲子園への道しるべ」を記して筆を置く。

1. 第一、全員が先ず己に勝て!

1. 健全、潑刺たる心身を鍛えよ。

1. 常に、純真・明朗・素朴になれ。

1. 進んで厳格なる規律に従え。

1. 礼節を尊び信義を重んぜよ。

1. 旺盛なる責任感を必ず果たせ。

1. 主将を柱として、頑強なる団結力をつくれ。

1. 鋭い攻撃精神と必勝の信念に燃えよ。

1. 勇猛果敢且つ緻密なる判断力を養え。

1. 日夜グラウンド以外の精神野球に徹せよ。

1. 練習で泣いて、試合で笑う闘魂を培え。

1. すべからく技術面の研究と錬磨を怠るな。

1. 試合には、図太い勝負根性で立ち向かえ。

1. 暴投・失策・捕逸は絶対するな。

1. そして最後に、「おれがやったるで」の気構えで戦えよ。

2005. 2. 18記

(昭和35～54年 監督・現松陵会会長)